

どうか今度こそ晴れてくれますように・・・私は心の中で祈り続けていた。前回は曇り空だった為に見ることの出来なかった輝く湖の姿を、どうしてもどうしても見たかった。そして仲間はみんな引き返してしまったというのに、私がなかば強引に引き連れてきた二人にも、あの湖の本当の美しさを見せてあげたかったのだ。

しかし空の状態はあまり良くない方向に向かっているらしく、曇り空からは時折霧雨までパラついていた。

・・・神様お願い。私達が湖の畔にいる時だけでいいから、太陽の光を与えてください。

広東メンバーの二人は、仲間が皆高山病で動けなくなっていたというのに、既に高度順応している私と変わらない速さで山を登っていた。

「何かスポーツをしているの？」

スラリとした容姿の二人に問いかけてみたが

「いいえ、別に」と首を振った。

きっともともと強い身体なのだろう。

サリーと名乗った彼女は、優しくそうなボーイフレンドより少し年上の姐さん彼女のように見えた。しばらく一緒に行動しただけでキビキビとした決断力やサッパリとした気性が伝わってくるなかなかカッコいい女性だ。

いくら高度順応しているとはいえ、やはり4000メートルを越える地点での登山は苦しい。彼らにしてみれば尚更だろう。苦勞を共にしているうち、私達はすぐにお互いに親しみが感じられるようになってきていた。

「ほら見て！湖はあそこよ」

頂上にたどり着き、真っ青な湖が横たわる方向を私が指差したその時である。まるで神様が私の願いを聞き届けてくれたかのように、それまで空を覆っていた雲が切れ太陽の光が空から射し込んできた。雲の隙間から降りて来た光が地面を明るく照らしながらゆっくりと移動すると、光が湖に射し込んだその瞬間、静かに横たわっていた湖は私達の目の前で、まるで眠りから目覚めたようにメラメラと燃え上がるような水色に輝き始めたのだ。

「きゃあ～！！見て！見て！」

私は悲鳴のような叫び声をあげた。やっぱりそうなのだ。この湖の色と輝きは普通じゃない。

三年前に眺めて以来忘れる事のできなくなっていた湖は、もしや年月を経て私の心の中で美化され過ぎているのではないかとの恐れも抱いていたが、やはり光をあびて輝いている乳奶海は、まるで湖の内側から光を放っているような輝きを持つ特別な湖なのだ。

「これなのよ！これをあなた達に見せたかったの！！」

サリー達は慌ててカメラを取り出すと、湖をバックに数枚の写真を写した。

しかし、感激の時間はこれで終わりだった。ほんの一瞬辺りを照らしていた太陽は、あっという間に再び雲の陰に姿を隠してしまい、二度と現れる事は無かったのだ。

ああ～・・・せめてもう少しの間、輝く乳奶海を眺めていたかったのに・・・。だが一瞬だけでも二人にこの湖の美しさを見せる事ができて本当に良かった。

「さあ、この上にももう一つ綺麗な湖があるから見に行きましょう」

二人を促し崖を登り始めたところでサリーの恋人が「アッ！」と小さく叫んだ。

「さっき写真を撮った時にサングラスを忘れてきたよ」

再び湖の畔に戻って探してはみたが、私達のいた正確な場所は判らなくなって見つけることは出来なかった。崩れ始めている天候の状態や山の麓で待たせている馬方達の事もあり、私達にはゆっくり探し物をする時間が無かったのだ。

先程までかけていたサングラスはスマートなデザインが施された物で、彼にはとても似合っていた。きっとお気に入りの品物だったのだろう。私は自分がこの場所に来たかったが為に道連れとして無理に連れて来てしまったような二人に対し、ちょっぴり責任のようなものを感じていた。

彼等がこの場に来たが為にガッカリするような事柄に遭遇するのは、私にとっても悲しい気分になるものだったが、サリーがその場の雰囲気振り切るように明るい声で言った。

「サングラスなんて新しいのを買えばいいだけじゃない！お金で済む問題なんて些細な事よ！！」

やっぱりサリーは気持ちの良い女性だ。

私達のショートトリップの中で最後の登りになる苦しい苦しい崖登りを終えた頃には、空を覆っていた雲が厚みを増してとうとう冷たい霧雨が本格的に降り始めてしまった。崖を登りきると見えてくる火山の火口のようなくぼみの底に青い水が濃淡のグラデーションで美しい模様を作っている五色湖が見える。暗い空の下で見ても、その深く澄んだ青い湖は美しかったが、やはり最高の状態を二人に見せられなかった事が私は残念で堪らなかった。霧雨に加えて冷たい風が吹きつけ、まともな雨具さえ持っていない二人は衣服が濡れて寒そうだ。

今日ここに彼らを連れてきたのは良かったんだろうか？

美しい湖の姿も存分に見せる事ができず、辛い思いをさせた部分の方が大きかったのかもしれない・・・二人に対して申し訳ないような気持ちになりかけてきた時、ふいにサリーの彼が私の顔を見つめて言った。

「綺麗だね」

思わず彼の顔を見つめ返した私に、彼は続けて言った。

「本当に綺麗だ。素晴らしい景色だよ。ありがとう。君のおかげで僕達はここに来る事ができたよ」

心の中にも霧雨が降りそうだった私の気持ちが彼の言葉でパッと明るく照らされた気がした。

でも、これと同じセリフを此処で聞くのは二回目なんだけど・・・。一昨日、ウィンや学生達と来た時にも同じ場所で全く同じ言葉をかけて貰ったのだ。日本人の私が、中国で中国人の彼らにこんな風に感謝の言葉をかけて貰えるなんて変じゃない？ 思わず心の中で苦笑してしまったが、サリーの彼は続けて言った。

「だってそうだろう？僕達の仲間は6人のうち4人は体調を悪くして引き返してしまったんだ。君がいなければ当然僕らも彼らと一緒に戻ってしまったさ。君に逢えて僕達はラッキーだったよ」

「でも空が晴れている時ならばこの湖はもっともっと綺麗だったのに・・・。あなた達にも見て欲しかった。今回はとても残念だったけど、それを見るために私は絶対またこの場所に来るわ!!」

私の言葉に彼が言った。

「僕らも来るよ。また一緒に来よう！」

胸の中に暖かい気持ちが込み上げてきた。彼の言葉はこの場の気分で思わず口から出てしまったものである事は判っていたが、国籍の違う彼らと私の気持ちがこんな風に通じ合えた事がとてもとても嬉しかった。

私達が出来た限り急いで洛絨牛場に戻った時には、待たせていた馬方達がものすごく不機嫌な顔で木陰に身を寄せている他には誰も居なくなっていた。

「全くだれだけ待たせたら気が済むんだ！あんた達一人40元払うんだよ!!」

私達の顔を見たたん、顔を歪めて声をあげる馬方達に「ごめんなさいね」とサリーはサッサと120元支払うと財布を取り出そうとする私を制して言った。

「仲間で私達の荷物を持って稲城のホテルで待っているの。私達このまま真っ直ぐ自然保護区の入り口まで行ってタクシーに乗るけど、元子はどうするの？」

今日再び沖古寺に戻っても、既にやることは無いように思えた。宝石の湖はもう2回訪れたし、天候の状態も当分期待できそうにない様子だ。

「私も一緒に自然保護区を出るわ。そして今日は亜丁村

に行く。」

私達は再び馬に跨って山を下り始めた。今度こそ洛絨牛場とはお別れだ。寂しさと天気の状態と、登山して歩き回った疲れとが重なって少し悲しい気持ちだった。しかも私の乗っている馬方はやたらに馬を叩くのだ。自分を乗せて歩いてくれる馬が可哀相で、馬方が鞭代わりに使っている木の棒を振り上げるたびに自分が叩かれているような気分になってくる。

「やめて!!馬を叩かないでよ!!」

私が声を張り上げても無表情な中年の男は聞く耳を持たない様子だ。馬に乗っていても全く楽しめず、亜丁との別れをしみじみ味わったりする気持ちにもなれない。あれほど再訪を熱望し恋焦がれてやってきた土地との別れをこんな風に迎えるのは惨めな気持ちだった。

今朝の管理人に見咎められ失敗に終わったモグリの特レックツアーで、「彼らは人間の言葉だって解るんだぜ」と愛情を込めて馬を撫でていた馬方青年の姿が頭に浮かんだ。彼らと一緒に行けたら良かったのにな・・・再びそんな思いが頭をよぎったが、今日の天気の事を思い返せばやはり中止になって正解だったのだろう。

沖古寺で自分の荷物を運び出し、亜丁の入り口まで行った。

こんなに辺鄙な場所で都合良く帰りのタクシーなど捕まるのだろうかと思っていたが、そこには山を降りてくる観光客を待ち構えているタクシーが数台止まっていた。

「稲城までだろ!! 200元だ」

数台を当たってみたが、どのタクシーの値段も同じようなものだ。適当な一台と200円で交渉がまとまると、サリーは私を辺鄙な田舎に一人残して行く事が心配な様子で、何度も「私達と一緒に稲城へ行きましょうよ」と誘ってくれた。

一緒に過ごした時間は短かったが、私もサリーとその彼氏にはどこか気持ちの通じ合うものが感じられ、すっかり彼らの事が好きになっていたのも別れるのは寂しく感じたが、亜丁村は今回の旅の中でも是非訪れたいと思っていた場所だし、数日前に偶然再会できた亜丁の少年にも村に来るよう誘われていた。あの時は時間が無くてゆっくり話も出来なかった。私はどうしてももう一度彼に会いたかったのだ。

「ありがとう。でも亜丁村に友達を探しに行きたいの。私は大丈夫だから心配しないで」

どちらにしろ方向は同じだったので、途中までタクシーに同乗させてもらう事にした。

私達が車に乗り込み出発を待っていると、別のタクシーと話をしていた一目で学生とわかる若い中国人旅行者の

二人組みが私達のタクシーの窓を叩き声をかけて来た。

「俺達稲城まで行きたいんだけど、同乗させてくれませんか？あっちのタクシーに尋ねたら偉く高い事言うんで、人数増やして割り勘にしたいんです」

彼らの言葉に異論のあるはずも無く、サリー達も喜んだ。

「やった！これでタクシー代が安くなるわ！」

ところがである。席を外していたタクシー運転手が戻ってきてその話を聞くと、若い青年達に言ったのだ。

「こっちに乗るのはいいが、料金はお前ら二人分で200元だけ」

「はぁぁ～！？」

私達全員、ドライバーの理不尽さがめつさに呆れて声をあげた。血気盛んな若者達と同じく年若いドライバーはその場で激しく口論を始め、私とサリー達はお互いに顔を見合わせたため息をついた。全くこの人間と来たら、最後の最後までこんな気分を味あわせてくれる訳か・・・。

「もう嫌。私この人間嫌いだよ！」

私が小声で囁くとサリーの彼が顔を歪めながら小さく頷いた。

「彼等は学生でお金が無いんだから、ちょっとまけてあげなさいよ」とドライバーをとりなそうとしたサリーの努力も報われず、激しい口論の末に学生達が去っていくと、

「あいつらを乗せたら、向こうのタクシーの客を取っちゃう事になるから俺は遠慮しただけさ」

気性の荒そうな若いドライバーは、喧嘩の興奮が納まらない口調で言い訳のように何度も繰り返していたが、そんな話は私達には全く関係ないし、すっかり不愉快になった気分はそう簡単に消えるものではない。全くこの人間は何でも金、金、金だ。私は心底うんざりしていたが、大人のサリーは「はいはい、そうよね。あなたの気持ち良く解るわ」と口を合わせてドライバーをなだめていた。本当に頼りになるお姉さんという感じだ。彼氏は良い彼女がいて幸せだろうな・・・。

車は走り出すと急な坂を登り始め、2キロ程登ったところで道路の両脇に小さなチベット式の住居がかたまって建っている場所が見えてきた。「ここが亜丁村だけ」ドライバーが言った。

夕暮れ時の村は丁度仕事から戻ってきた人間達で活気づいている様子だ。家の煙突からは煙があがり、村の子供達が道路わきで遊んでいた。庭では放し飼いにされているニワトリ達が歩き回り、村はずれの畑では金色の麦穂が美しく波打っている。それまで沈んでいた私の気持ちがこの風景を見て急に波立ってきた。管理人のうろつく自然保護区のがめつい宿なんかより、ここの方がずっと楽しそうな場所じゃない！！

車をゆっくり走らせながら宿を探し、村のはずれの方にある小さな家の前で尋ねると、ウチは宿屋をやってるんだと答えた。初老のおじさんは優しそうに見えたと、尋ねた宿代も20元と安価だったのでそこに決めた。

サリーはまだ心配そうに、

「本当にこんな所で一人で泊まるつもり？私達と一緒に稲城に戻った方がいいじゃない！！」

と言ってくれたが、私はお礼を言い二人と握手してお別れした。車を降りると再び一人きりだが、全く不安は感じなかった。

「さあ、これから亜丁の旅、第二部が始まるよ」

私は夕暮れの村を見渡すと、自分に向かってそう呟いた。

(次号に続く)